

まんだら通信

第221号 (通巻256号)

平成26年11月 西暦2014年 佛曆2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



お江戸の暮らし

世の中はいつも、右肩上がり
に良くなっている、と私たちは
思っています。だから江戸時
代など遠い昔のことなど参考
にならない、と思いがちです。
私の祖母は大東亜戦争敗戦
の翌年、昭和二十一年十一月、
八十三歳で亡くなりましたか
ら、生まれたのは約百六十年
前、ペリー提督が偉そうな顔を
して、黒船でやってきたよう
どその頃になります。でも、
「私を可愛がってくれた祖母
が生まれた頃」と思うと、関
係のない大昔のように思え
なくなります。

える人が多いのではないですか。
ところが実際は、その百姓町人よりも武士の
方が、はるかに貧乏だったということをご存知
でしょうか。
庶民が江戸時代二百五十年間、ただ耐え忍ん
で暮したなどという言い方こそ、みんながバカ
だったといっているわけで、随分不自然ではな
いかと思います。現に江戸は一〇〇万人近い世
界一の大都会でしたが、北町と南町の奉行所で
パトロール役の警察官、つまり定町廻同心は合
わせてわずか十二人だったそうです。
それほど、江戸時代の治安はよかったという
ことですね。
治安がよいのは、日本人がもともと自分勝手
を嫌う性格だったからでしょうが、しっかりとし
た自治組織があったという点も見落せません。
町内には自身番があり、町内の役員が毎日交
代で詰めていて、町奉行所からの伝達、もめ事
の調停、けんかの仲裁、行き倒れの世話、道路
の修理、犯罪者の留置などなど、役所の出先の
役をしていました。大抵は平穩無事ですから、
世間話や碁将棋を楽しんでいることの方が多
かったようですが。

幕府は、下々の暮らしには口を出さ
ず、明治以来の役所のように醸造許可
がなければ酒を造ってはいけないと
か、医師の資格がどうか、飲食店
の許可証とかは一切ありませんでし
た。病氣や薬学に心得のある人はお医
者さんになれたし、食べ物屋もおいし
ければ客が増えて繁盛し、まずければ
客が来なくなりますから、世間の評判
任せでうまくいっていたわけです。
お医者さんも寺子屋も同じこと
です。考えてみれば、味噌や醤油を作る
ついでにどぶろくを造って自由に飲め
たお百姓など、勝手に作ってはならん
という明治政府の言い分ほど、理屈に
合わない話もないと思います。
教育も、幕府はほとんど口出しをし
ませんでした。

寺子屋での読み書きそろばんだけでなく、今
なら東大にあたる幕府の最高学府、湯島の
『昌平坂学問所』は、一般の勉強好きに開放さ
れていた部門もあつたそうです。町中にも専門
的な学問を教える私塾もあつて、
『大日本沿海輿地全図』(日本全図)で有名な伊
能忠敬も、こういう私塾で測量術を身に付けた
ということですね。

江戸の町内には、二、三ヶ所は寺子屋があり
ましたが、子供をどの師匠に預けるかは、お
かみさんが決めました。ご亭主は大工や左官な
どのように家の外で働くことが多かったし、指
物師や鋳職などのような居職のように、家に仕
事場があつても仕事一筋は今と変わりませんか
ら、おかみさんが自然に家の中の主導権を持っ
ていました。

昔は女が虐げられていた、なんていうのは全
くのウソで、追い出されるのは大抵ご亭主だつ
たとか。『バツ一でこぶ付き』は恥ずかしいど
ろか引く手あまたで、すぐに再婚できたそう
です。乳幼児の死亡率がとても高かったその頃
ですから、理屈にかなっていません。「嫁に行つたら
二度と実家の敷居を跨がない」のは、しきたり
に厳しいお武家のことでした。

むしろ親によつては、嫁入りの娘に三行半を
持たせてやつたという話もあるくらいです。お
かみさんは町内に沢山いた独り者の洗濯、つく
ろいもの、食事の世話など身の回りの世話を何
軒か請け負ってへそくりを貯めました。

そのへそくりは、寺子屋の月謝や日用品代、
女同士連れ立つての花見や歌舞伎見物の小遣い
になりました。

農民は厳しい年貢に喘いでいた、というのも
大分違うようです。都会同様に俳句の会や朝顔
の品比べ、菊の出来を競い合う集まりがあり、
富士講や伊勢講など、お参りをかねた遊山の集
まりもありました。徳川二五〇年の間、物価も
ほとんど変わらず、勿論戦争もありませんでした。
そして物作りの職人が尊敬された日本。
徳川家康公の基本方針は『権あるものは財う
すく、財あるものは権うすく』だったそうで、

幕府中枢の殿様は何れも直接の家来の五万石
十萬石で、島津家七十七万石や加賀藩百二萬石
などの外様大名は、中央政治に参加させない仕
掛けだったそうで、権力者が財力を併せ持つと
国が乱れるのは世界の常識ということを考えて
と、徳川幕府のこの方針は、国の安定にとって
大きな力になりました。

増えてきた外国人観光客の、日本についての
印象は「世界一の親切、清潔、安全」などだそう
です。物作りではすでに国際的な信用ができて
上がっています。みんな江戸時代、いや国始まっ
て以来のご先祖からの贈り物です。

先頃、文部科学省の統計数理研究所が発表し
た第十三次国民性調査によると、「他人の役に立
ちたい」人が、今までの調査で最も多い45%に
、「もし生まれ変わるなら日本に」と答えた人は
83%だったそうです。

にっぽん人情小噺 落語家 三遊亭鳳豊 第一〇六話 アンカー

MOKU出版株式会社は、東京の本郷三丁目
と湯島の間ビルのなかにあります。

窓から秋の日差しが、部屋の中で忙しく動き
回っている社員の人たちの姿をおもしろそうに
覗き込んでいました。

一本の電話が鳴りました。「はい、MOKU
出版です」

いつものように、明るく電話をとつたのは、
芳野由貴さん。総務部のキャリアウーマン。美
しいママさん社員です。

電話は徳島からでした。電話の主は本浄敏之
さん。

「あの、徳島新聞の投書欄にちよつといい話が
載つたので、鳳豊さんに読んでもらえたら、
と思って電話をしたのですが……」「はい、わ
かりました。どんなお話ですか?」

由貴さんから私のところにメールが届きまし
た。「とってもいい話なので、もしよければ投書
をメールで送りますが」「了解」私は軽い気持ち
で、由貴さんからのメールを開き、読み始めま

した。
投書の主は、本浄世子さん。電話を下さった
本浄さんの奥さんでした。

読者の手紙

本浄世子 主婦 七十二歳

先日、行われた上板中学校の体育祭のできごとです。

まさに閉会式がはじまろうとする時、三年生の男子生徒から「少し時間を下さい」との声が聞かれました。直後に、学級旗を持っていた生徒たちが前に並んだかと思うと、声かけた生徒がある男子生徒を背負い、トラックを歩きはじめました。その後ろを三年生全員が続いています。

よく見ると、背負われている生徒も周囲で支えている生徒も顔をくしゃくしゃにして泣いています。集団が近づくと保護者から声がかかり、拍手が巻き起こりました。

何か起こったのかと思つて見ていると、背負われているのはリレーの選手で出番の前に熱中症気味だったため、代わりの選手に走ってもらい、自分は走れなかつたそうです。

でも、どうしても走りたかつた。クラスの仲間も走つてほしかつた。それぞれの思いがひとつになり、みんなでA君とともにトラックを一周しようということになったそうです。周囲の大人の目が潤み、「ほんまに、こんなことができたんじゃ」と拍手の輪が広がりました。こんな素晴らしい生徒が育っているのはうれしいかぎりです。

由貴さんは、投書の主、本浄世子さんと話をしました。すると、もう少し、いい話の香りが広がりました。世子さんの声も弾んでいます。

「A君のお母さんは看護師さんでしてね、介抱していたんですけれど、どうしても走れる状態じゃなかつたみたいなの。だから最終的にはあきらめたのね」

「そうだったんですか。きつとまわりの子たちは、それを聞いていたんですね」

私には、想像がつかます。ちよつと、いつもの調子で書いてみましょうかね。

「ダメ、絶対走つたらダメ、死んじゃうから」「お母さん、僕、走りたいよ。大丈夫だから」

「大丈夫じゃないの、お母さんが言ってるんだから。熱中症なのよ」「僕、走るよ、クラスの皆と約束したんだから。絶対、勝つて。中学最後の運動会だよ。もう、みんなと別れるんだ。だから、走らせて。みんながつないだバトン、僕が持つてゴールするんだ」

「おい、今日は休め。俺たち、お前の分まで一生懸命走るから、応援してくれ」

幼馴染のB君が横になつているA君の手を強く握つて、そう言いました。「みんな、がんばろうな、こいつ、命をかけていま熱中症と戦っているんだ。俺たちも中学最後の運動会だ。こいつの分まで走ろうぜ」「おー」そう言うと、次々とA君の手を強く握り、全力疾走を約束したのです。

担任の先生も、その様子を温かい眼差しで見えています。
ヨーイドン。号砲が鳴つて、一斉にスタートを切りました。みんなの目が真剣でした。必死にバトンをつなぎます。後ろに左手を伸ばすと、そこに前のランナーからバトンがストンと渡ります。それをすぐに右手に持ちかえ、バトンを大きく振りながらカーブを曲がります。「がんばれ、がんばれ！」A君も、A君のお母さんも思わず大きな声を出しました。A君の代わりに走つた子も、抜かれそうになるけれど、抜かせません。ゴール！最後の選手はテープを切ると同時に倒れ込んでしまいました。

A君はあふれた涙がこぼれないようにお母さんを見上げました。お母さんの目も涙でいっぱいでした。
「ごめん、一生懸命走つたけど、君がいないとダメだった。やつぱり、君が一番だよ。おい、みんな、Aをみんなで背負つてグラウンドを一周しようぜ。先生、いいですよ。僕たちの最後の運動会だから」先生もにっこりうなずきました。

「徳島の上板というところは何も田舎の町です。でも、いまの時代にこんな素敵な子供たちが育つていたんですね。そのことを全国の人たちに知っていただきたい。子供はもともとまつさらなんです」
本浄世子さんはそう、由貴さんにおつしやつたそうです。
「お話も素敵ですけど、お電話をくださつたお客様の気持ちもうれしくて……。ああ、そうですね。だから、人情小断なんです」
A君の最後の運動会、それを見て投書した本浄世子さん、それを採用した徳島新聞の記者さん、わざわざMOKUに電話をくれたご主人、そして、芳野さん。うん、いい話のりレーの六番目が私でした。このバトンを受け取つてくれたあなたが、アンカーですよ。
はい、左手を後ろに出して……。いま、バトンが渡りました。走るんですよ、走りたくても走れなかつたA君のためにもあなたの人生を……。前を向いて胸を張つて、腕を思い切り振つて、ね。

今月号もMOKU出版と著者の三遊亭鳳豊師匠のご好意で、今月号も転載させて頂きました。紙の質や装幀を含めて、物欲しげな商品ばかりの今の世の中で、そのような浅はかな考えを超えて、人生の意味を深く考えるための材料が詰め込まれた、今どき珍しい雑誌です。

ちが育つていたんですね。そのことを全国の人が知っていただきたい。子供はもともとまつさらなんです」
本浄世子さんはそう、由貴さんにおつしやつたそうです。
「お話も素敵ですけど、お電話をくださつたお客様の気持ちもうれしくて……。ああ、そうですね。だから、人情小断なんです」
A君の最後の運動会、それを見て投書した本浄世子さん、それを採用した徳島新聞の記者さん、わざわざMOKUに電話をくれたご主人、そして、芳野さん。うん、いい話のりレーの六番目が私でした。このバトンを受け取つてくれたあなたが、アンカーですよ。
はい、左手を後ろに出して……。いま、バトンが渡りました。走るんですよ、走りたくても走れなかつたA君のためにもあなたの人生を……。前を向いて胸を張つて、腕を思い切り振つて、ね。

ふれあいコンサート
11月23日(文化の日 日曜日)
開場 19:00
開演 19:30
会場 紫雲寺本堂
入場料 2,500円
出演
深津純子(フルート)
千代正行(ギター)
三浦肇(パーカッション)
おなじみの深津純子さんと、気鋭のギター、打楽器の組み合わせ。
どうぞお楽しみに!

▼今日7日は立冬。寒さの気配はまだありませんが、暦の上では冬の始まりとか。手付かずの残りはあと1ヶ月になり、歳のせい、日にちの流れの速いこと、驚くほどです。▼表紙の写真は、スリランカ成田山幼稚園近くの日曜市です。近所のお百姓が熱帯の果物や野菜を並べています。

手前の紫色はココヤシのつぼみ、赤い色はとても辛いトウガラシ。お客さんの足下には、サラダに入るとおいしい四角豆の束が並んでいます。

車いすの助けが要るようになって、行きたい国のひとつです。

▼「お江戸の暮らし」は『大江戸生活事情』石川英輔と、数年前に亡くなった杉浦日向子さんのご本を

参考にしました。

江戸時代と今の大きな違いは、庶民の事に政府は口を出さなかつたことです。我々下々はお上の世話にならずに済んだということ。今の政府は善の上げ下げまで口を出しますから、その分税金が、比べるのもいやになるほど高くなります。こんな80歳の私でさえ、年収の3割〜5割近くを払っています。お百姓の年貢。首をくくるほどの厳しさだったようにいいますが、取れ高が増えた幕末でさえ2割程度だったという、ウソのようなホントの話です。

今と違って実力の世界ですから、卒業証書みたいなものがあつたとしても、何の役にも立

ちません。勉強嫌いの子供に、嫌がることをさせることはないのです。良〜く考えれば今も通用することです。義務教育だけで社会に出てから、興味のあることが見つかったら、それから勉強すればいいのです。好きなことなら、勉強に身が入りますから。▼今月はシュウメイギク(秋明菊)【キンポウゲ科イチリンソウ属】京都の貴船に多かつたので別名は貴船菊というそうです。古い時代に渡ってきた帰化植物で、宿根草です。花の大きさは5センチぐらい。近ごろは交配種が園芸店などで売っていますね。粉を吹いたように写っていますが、本物は美しい赤紫です。2014.11.07 龍渉



余滴